マンハッタンからクイーンズブリッジを渡ってすぐの地上駅「クイーンズボロー駅」から徒歩１分。ロングアイランドシティ（ＬＩＣ）の中心部にあって交通至 便の立地条件を備えている。オープンは去年の６月、池澤崇（いけざわ・たかし）さんと田代文雄（たしろ・ふみお）さんの二人が意気投合してオープンした真 新しいアートスペースだ。

アートスペースResobox（レゾボックス）

大きな窓が明るさを際立たせる複合アートスペース

日本アートをLICから発信

　大きなガラス窓越しに明るい内部と展示作品がストリートからも目に飛び込む。レゾボックスはひとつの空間の中で「ギャラリー」のほかに「カフェ」の経営と「ワークショップ」の運営を同時に行っていて、顧客はそれぞれの仕切りを越えて自由に姿を変える。
　人気のワークショップには日本舞踊、沖縄舞踊、墨絵などの文化系と居合道、杖道、空手道などの武道系のクラスがある。
　カフェは日本式のコーヒーやスナックにこだわり、アメリカにはないコーヒーゼリーなどが、周辺のビジネスマンたちの間でも次第に浸透してきた。注文を受 けてから作るコーヒーのサーブに初めはとまどいを見せた客たちも、今ではすっかり日本の喫茶店感覚を楽しんでいる。

–

　「レゾボックス」という名前はResonate （共鳴）＋Box （箱）という二つの言葉からなる造語。オーナーの一人ミュージシャンの田代さんが、自分の音楽とビジュアルアートとの組み合わせをコンセプトとするプロ ジェクトに命名したものだ。
　池澤さんと田代さんの二人がニューヨークで出会ったのは07年。学生の頃から「起業」に強い関心を抱いていた池澤さんは、大学卒業と同時にニューヨーク へ。邦銀で働いていた時にジャズミュージシャンの田代さんと出会う。二人は音楽の話で盛り上がり、池澤さんはたびたび田代さんのコンサートに足を運ぶ間柄 となる。

–

　二人の距離が急接近したのは、去年の東日本大震災の直後のこと。どちらかというとそれまで日本のことに関心を払ってこなかった池澤さんと田代さんだが、日本人として何ができるか、と真剣に考えるようになる。
　「義援金を集めて被災地に送ることも考えましたが、自分たちにしか出来ないことがほかに何かあるはず」とさらに考え続けた。
　ちょうどその頃、池澤さんのほうは、日本人アーチストをレストランなどにイベント企画とともに仲介するビジネスを実験的に始めていたところだった。
　「僕たちはニューヨークのことをよく知っているし、経験もある。日本のアートや文化を自分たちでオーガナイズして、育てたアーチストをどんどん外に紹介 していくような、一種の芸能プロダクションみたいなことが出来ないか」とのアイデアが浮上。
　こうして池澤さんのビジネスマン的なアイデアと、田代さんのミュージシャンとしてのコンセプト「レゾボックス・プロジェクト」が大震災を境に結びつき、アートスペース新生「レゾボックス」が誕生した。
　クイーンズ区のロングアイランドシティ（ＬＩＣ）を選んだ理由のひとつは、80以上もの言語が飛び交うと言われるクイーンズ区の多様性がある。文化が入り混じりニューヨーク市の５区の中でももっとも「ニューヨーク的」と言われる所以だ。
　池澤さんは言う。「クイーンズだからこそ挑戦だと思うんです。マンハッタンの高学歴・高収入の一部の層を相手にするのではなく、雑多なカルチャ

ーが入り 混じるクイーンズで『面白いジャン』と言わせるような活動が出来てこそ、日本が好きになってもらえると思うんです」。

「ここは異文化を理解してくれる土壌が充分にあると思う。ＬＩＣがやがてブルックリンのダンボ地区のように発展を遂げると信じてますしね」と笑う。

長い間、倉庫街ばかりが目立つ無味乾燥な地区だったが、近年、開発が進み高層ビル建築が活発化、家賃の高騰でマンハッタンを逃げ出してきたアーチストた ちがスタジオを構え、美術館「ＰＳ１」の影響もあってか、ギャラリーの進出も目ざましく、アートの街として変貌しつつあることは間違いない。

「偉そうなことを言うようですが、僕たちが変えたいと思っているんです。誰かが何かを始めなければ。何が作り出せるか分からないけど、レゾボックスとい う箱の中でいろんなものをゴチャゴチャにシェイクして、魔法の箱からポンと出すように次世代アートを作りだしていけたらいい」と若きオーナー二人は夢を語 る。

–

自分たちらしさを生かして「日本のために出来ること」に行き着いた「レゾボックス」の活躍に期待しよう。

（塩田眞実）